

「香川」の歴史－市民学び講座の一例として

平山 孝通^(*)

平成25年(2013)10月、2日間従事した茅ヶ崎市教育委員会社会教育課主催の市民学び講座(市民学び講座の詳細は本研究報告収録井上香乃主事の論考を参照)の様子を報告したい。参考文献、レジュメ(図1・2)、講座内容等を記し今後の講座の覚えとしたい。

まずは、講座の基本的情報を示す。

日 時：平成25年10月16日、18日の両日の
5時から45分間

場 所：茅ヶ崎市立香川公民館保育室

対 象：公民館に集う小学生高学年とその母親および
一般の人(偶々香川県出身者)

参考文献と資料(観光地図・古地図・郷土かるた・
紙芝居・絵葉書および新聞記事他)
ゴシック体で表示の文献・資料8点およ
びレジュメを持参。

『茅ヶ崎市史』1資料編上(茅ヶ崎市史編集委員会編、
茅ヶ崎市・昭和53年10月発行、市制施行30周年
記念刊行物)

『茅ヶ崎市史』4通史編(昭和56年3月発行)

『茅ヶ崎市史』5概説編(昭和57年3月発行)

『写真集 茅ヶ崎きのうきょう』(昭和63年10月
発行、市制施行40周年記念刊行物)

『茅ヶ崎の記念碑』(塩原富男著・茅ヶ崎市教育委員
会・平成3年3月発行)

『ブックレット2、ちがさき村ごと歴史散歩』(茅ヶ
崎市教育委員会、平成22年10月発行)

『ちがさき丸ごとふるさと発見博物館、香川・下寺尾
の周辺』(茅ヶ崎市教育委員会、平成25年5月発行)

『香川の歩み』(香川の歩み編集委員会編、茅ヶ崎市
香川自治会・昭和53年10月発行)

『讃州香川氏の歴史を読む』(香川安清著、昭和56

年4月発行)

『室町幕府管領細川家と讃岐香川氏』(湯山学著、平
成7年2月発行)

『ふるさとの歴史散歩』(塩原富男著、茅ヶ崎郷土会・
昭和58年6月発行)

『ちがさきガイドマップ』(茅ヶ崎市観光協会・茅ヶ
崎市産業振興課、平成25年5月発行)

『復刻古地図、江戸前期、相模国全図・解説付』(人
文社、原図は1650年頃作製)

『茅ヶ崎郷土かるた』(母親クラブわかば会作製・発
行、手作り)

『茅ヶ崎かるた』(茅ヶ崎郷土会作製・発行、茅ヶ崎
市元氣基金活用事業)

「手づくりかみしばい、三橋勘重郎ものがたり」(紙
芝居10枚、茅ヶ崎市教育委員会社会教育課+ボラン
ティア、平成25年10月作製)

「諏訪神社改築記念絵はがき」(茅ヶ崎町香川、昭和
3年発行、「諏訪神社拝殿正面」「境内の一部」袋入
り2点、全体の点数は不明)

「伊勢神宮の式年遷宮」および「伊勢参宮」に関する
平成25年9月、10月頃の『新聞記事』

茅萱の鉢植え

鹿 笛

レジュメ(2枚、巻末参照)

- ① 「茅ヶ崎」の地名の由来は
- ② 「香川」が初めて資料に出たのはいつ
- ③ 香川小五郎・三郎らの活躍
- ④ お伊勢参りと香川の人々
- ⑤ 香川村・松林村香川・茅ヶ崎町香川・茅ヶ崎市
香川の誕生はいつ

資料：町村の変遷

.....

こんにちは。今日はみなさんの住んでいる茅ヶ崎市香川の歴史をお話します。お手元にレジュメを配りました。それを基にしてゆっくりと進めます。何回でも繰り返えますので、質問はたくさんしてください。(ゴシック体で表示した資料を机に並べる。)

レジュメ①の「茅ヶ崎」の地名の由来は、を説明しましょう。

『茅ヶ崎市史』1巻149頁、『同』4巻154頁などの資料を参考に説明しましょう。

なぜ、茅ヶ崎という地名が付けられたのでしょうか。

茅ヶ崎の茅は「茅萱^{ちがや}」という水辺や草地に生息するイネ科の植物です。花期は4月～7月で、高さは50センチ前後、白い花尾が特徴で市内では今日でも柳島などで見られるそうです(茅萱の鉢植えを見せる)。その茎や葉は副業の材料として利用されていました。現在、茅ヶ崎と呼ばれる地域にはこの茅萱が一面に茂っていたのでしょうか。

次に「崎」ですが。崎とは海や湖に突き出た陸地の「先端」のことを意味します。

まずは、茅ヶ崎に伝わる昔話を聞いてください。

昔々、大昔のことです。この辺りには、海に向かって陸地が突き出た半島のような地形がみられました。そこには「ちがや」が生い茂っていました。誰呼ぶとなく「ちがやのみさき(茅萱の崎、岬)」と言われていましたが、いつの日にか今で言う「ちがさき」へと変わっていったのでしょうか。このようなお話が古くから伝わっています。このお話を私にしてくれたのは明治20年生まれの方で、昭和50年代の中頃のことです。きっとこの方は、このお話をお父さんやお母さん、またはおじいさんやおばあさんたちから聞いたのかも知れません。そのおじいさんはそのまたおじいさんやおばあさんから聞いていたのかも知れません。というように、茅ヶ崎の人は、代々このお話を伝えてきたことが想像されます。そのようにして大昔の様子が今日まで伝承しているのです。語り大切さを今一度考えたいと思っています。

これは民俗学という地名伝説という言い伝えです。

次は、歴史学の方法で考えてみましょう。茅ヶ崎の初出の資料は、文明2年(1470)2月11日の「熊野^{くまの}

那智大社^{なちたいしゃ}」に関わる資料です。それには平仮名で「ちかさき」「下のまちや」「やはた」と記されています。現在の茅ヶ崎、下町屋、矢畑を指すものと考えられます。今(平成25年、2013年現在)から543年前の資料です。当時の茅ヶ崎のことは詳しくはわかりませんが、その頃から「ちがさき」という地域を意識する人がいたことがこの資料から窺われます。市域には熊野神社が数社分布していますが、それは熊野信仰の産物とも考えられます。たまたま残った資料から文明2年2月という区切りが分かりますが、当然その以前から「茅ヶ崎という地域」なり「茅ヶ崎に住む人々」を意識した永い生活の営みがあったはずで

民俗学や歴史学の方法からはこれらのことが分かりますが、これ以上の解明は難しいので、今後は考古学の方法に期待したいと思います。

いつの日か、発掘された遺物の中に「ちがさき」、または「茅」や「崎」の文字が1字でも発見されることがあれば、より古い時代に「ちがさき」の発生を考えることができます。こんな楽しいことはないと思いますので、皆さんの好奇心に期待したいと思います。

次に、レジュメの②に移ります。「香川」が初めて資料に出たのはいつ、を説明しましょう。

『茅ヶ崎市史』4巻116～120頁などの資料を参考に説明しましょう。

はじめに地図で香川の位置を確認してみましょう。

この『ちがさきガイドマップ』は茅ヶ崎市観光協会が平成25年5月に発行した地図です。さあ、みなさんが住んでいる香川を探してください。



香川はどこだ！（前田照勝氏提供）

（小学生たち）「香川は、どこだ、どこだ、どこだ。香川小学校があった。……香川駅が、相模線の線路だ。私の家はこの辺だ。……」と、会話が止まりません。茅ヶ崎市の中で香川の位置が少し理解できたようです。

次は、古地図（『江戸前期、相模国全図』）を開きましょう。これは江戸時代の前期の1650年頃に作製された地図の複製品です。360年程前の地図です。香川はどこでしょうか。現在の地図と比べてください。

東海道（国道1号）、一里塚、相模川、江ノ島、烏帽子岩、小出川、千ノ川、大山街道などが描かれています。村名が幾つか間違っていますがわりと正確な地図といえます。

「あった。あった。香川だ。」（と、指さす小学生がいます。）

そう、そこです。大山街道の北側にありますね。今の地図と変わりません。高座郡はだいたい色、鎌倉郡は朱色など郡別に色彩が施され郡境などがはっきりしています。完成時の色はもっと鮮明だと思います。このような古い地図を比較してみると発見があります。色々な地図から香川を探してみましょう。必ず興味深い大発見があるはずです。

さて、本論に入ります。

「香川」が初めて資料に登場したのはいつのことでしょうか。

それは、「大庭御厨」^{おおばみくりや}に関わる資料の中に記されています。大庭御厨とは、鎌倉権五郎景正が開発した茅ヶ崎から藤沢にかけての広大な地域を、伊勢神宮の神領として長治年間（1104～6）に寄進しました。それは、信仰によって一族の結束を深めることと伊勢神宮からの庇護を受けるために寄進したものです。この地域は大庭野とよばれる原野で野生の動物がたくさん生息していました。当時の和歌に鹿が詠まれているので、鹿もいたはずで（鹿笛を吹く。）

その御厨^{みくりや}で事件が起きました。鎌倉に館を持っていた源義朝（頼朝の父）が御厨に侵入し、その住民とトラブルを起こしました。源氏の再建に努めていた義朝の行動の一端とみることができますので、単なる乱暴とは考えにくい一面もあります。その詳細は天養2年（1145）に記された『天養記』^{てんようき}に見えます。

その資料は伊勢神宮の神宮文庫に大切に保管されていますが、原寸大の複製品が神奈川県立歴史博物館に展示されていますので一度ご覧下さい。神奈川県史において重要な資料が、茅ヶ崎の、とりわけ香川の歴史においても同様に重要な資料といえるのです。その資料の中に「香川」の地名が出てきました。平安時代末期のことで、今から868年前のことです。大きな時代の転換期にあたり、その後40年を経て頼朝によって初めての武家政権である鎌倉幕府が成立しました。

なお、市内には御厨の関連でしょうか伊勢信仰に関わる神明神社^{しんめいじんじや}が4社祀られています。鎌倉権五郎景正を祭神とする御霊神社^{ごりようじんじや}も祀られています。神社の分布にもそれなりの歴史的理があるようです。

蛇足ですが、市内には源氏ゆかりの史蹟が、多数存在しています。下町屋の旧相模川橋脚は源頼朝と稲毛重成とその妻たち、浜之郷の鶴嶺八幡社は源義家、同参道は武蔵坊弁慶、南湖の御霊神社には源義経とそれぞれ関わりのある史実や伝説が伝わっています。それらの説明は次の機会にしましょう。

次は、レジュメ③の香川小五郎・三郎らの活躍、をみてみましょう。

『茅ヶ崎市史』1巻109～110頁、『同』4巻136頁などの資料を参考に考えてみましょう。

鎌倉幕府の編年体の記録である『吾妻鑑』に、茅ヶ崎の香川付近を本拠地とする武将の活躍が記されています。

承久3年（1221）5月に、後鳥羽上皇が北条氏を追討するための争乱である承久の乱が起きますが、その6月14日の宇治川の合戦の功名者の報告書の中に、香河（川）小五郎・同三郎などの名前が記されています。香川氏は香川を本拠とする武将であり、この乱の功績で安芸国（広島県）に所領を得てそこで発展しました。その後、安芸の香川氏の一族が更に讃岐（香川県）に移り活躍しました。

なお、「香河」と「香川」は同じと考えましょう。少し難しくなりますが、音通といって漢字における同一字音の通用が歴史資料の場合によくあることです。

承久の乱の顛末を記した軍記物の『承久記』という資料では「加々輪^{か が わ}」と記して、「香川」を指していま

す。

今後、歴史の資料を読む時には注意していただきたいことの一つです。

資料によって色々な表現や書き方の例を示しますが、名前だと「二郎と次郎と治郎」「重郎と十郎と十朗」、姓だと「菊地と菊池」「伊藤と伊東」などが、それぞれ同一人物のことがよくあります。今日のように「戸籍名」を正確に記す必要はなかったのです。

次は、レジュメ④にいきましょう。お伊勢参りと香川の人々、です。

今年は、伊勢神宮の、正式には「神宮」と呼ぶそうですが、その神宮の式年遷宮の年にあたります。「式年」とは「定められた年」という意味です。新聞・テレビなどで報道されていますので、20年に一度のご遷宮については、皆さんはよくご存じのことと思いますが、今一度確認しておきましょう。

簡単に言えば、20年ごとの神様の大規模な引っ越しと考えれば理解しやすいでしょう。

式年遷宮は飛鳥時代、持統天皇の在位中の690年に始まったとされていますが、必ずしも20年ごとではなかったようです。戦乱で百年以上も途絶えたこともありました。太平洋戦争の敗戦で4年延期にもなりましたが、今回が62回目だそうです。中心となる神事は神様を祀る正殿の隣りに、20年ごとに同じ様式の正殿を新たに建てて神様を遷す「遷御せんぎょの儀ぎ」です。内宮ないぐうでは10月2日に、外宮げぐうでは5日にそれぞれ終了しました。神宝も新しくして納めます。周辺にある別宮の社殿や鳥居なども造り替えます。新しい正殿をお参りしようと国内外から多くの参拝者が訪れているそうです。

皆さんの中には既にお参りに行かれた方がいるかも知れませんが、私は2度お参りに行きましたが、杉の大木が印象に残っています。

このお伊勢参りに、江戸時代の後半、今から188年前の文政8年(1825)の正月9日に旅立ち2月12日までの1ヵ月とちょっと、35日間の旅に、香川村の代表の11人が出かけました。弥次さん・喜多さんの道中姿を想像してください。20年ごとの式年遷宮にあわせたものか、60年ごとの「お陰参り」(当

時の人達は神様のお陰で神宮にお参りができたと考えたようです。)にあわせたものかは、はっきりしませんが、お伊勢さんを目指して旅立ちました。文政13年には多くの人々が伊勢神宮を目指しましたが、その5年前のことです。

『香川の歩み』の51頁に掲載されている「伊勢道中覚」によって、旅の様子をたどってみましょう。

当時の人々の信仰心は今と比べ物にならないほど篤く、日本の神々の頂点とされた伊勢神宮は、ご利益を得たい庶民にとってまさに一生に一度は訪れたい、あこがれの神社だったのです。

11人は、東海道を一路伊勢を目指して出発しました。小田原・三島・由比と進み、興津で三保の松原と久能山に立ちよりました。世界文化遺産の富士山も当然間近で眺めています。その後、秋葉の大権現、豊川稲荷、伊勢神宮の参宮へと続きます。その後奈良にまわり春日大社・東大寺の大仏などをお参りして、高野山にもものぼり、そこの宿坊に泊まりました。大坂(阪)の道頓堀などの見学、舟で京へ、京の社寺を巡り、大津で三井寺にもお参りしました。帰路には身延山にも立ちよりました。信心深い一行だったのでしょいか、神社仏閣をたくさん訪ねています。今日の観光名所と変わらないところを、巡っていたのですね。

当時の人にとっては、一生に一度とっていい大旅行です。旅費は村人全員で積み立て、その内の代表者11人がこの大旅行に臨んだことでしょう。村人へのお土産も当然はずんだことに違いありません。

蛇足ですが、この「伊勢道中覚」を大切に保存していた三橋家の茅葺きの住居は現在、堤の浄見寺の境内に移築され市指定文化財の民俗資料館旧三橋家住宅として市民に公開されています。188年前の寒いお正月、お伊勢参りの同行者11人は三橋家の囲炉裏を囲みながら、お神酒で旅の安全を祈ったのかも知れません。そして、35日の長旅の思い出話をその囲炉裏を囲みながら、また、秋の豊作などを祈りつつ、一年の農作業についても語り明かしたことでしょう。お伊勢参りは地域共同体の絆を深める重要な意味を持つイベントの一つといえるかも知れません。

私はこのような想像をしながら楽しく歴史の資料を読んでいます。

そうです。できたら、民俗資料館旧三橋家住宅の囲炉裏端でお伊勢参りのお話をもう一度してみたいものです。道中でこんな珍しいことがあったんだよ、と当時の村人の声が聞こえてくるかも知れません。

ところで、皆さんは囲炉裏端を知っていますか、結構暖かいものです。でも部屋全体はなかなか暖まらないので、藁葺きの家に住むのは大変だったとお住まいだった方に聞いたことがありました。歴史を感じる意味でも、一度体験してみる価値はあります。

そろそろ最後です、レジュメ⑤の、香川村・松林村香川・茅ヶ崎町香川・茅ヶ崎市香川の誕生はいつ、を検討してみましょう。

『茅ヶ崎市史』4巻の近現代第1章の「茅ヶ崎四カ村の成立」(399頁～)を参考にしてお話しをしましょう。

レジュメの資料の「町村の変遷」をみてください。これは『茅ヶ崎市史』5巻592頁の表です。江戸時代に一つの組織として存在していた23の村々が何回かの合併を経て、現在の茅ヶ崎市となりました。

昭和22年(1947)10月1日の市制施行、昭和30年(1955)4月5日の小出村の分村合併によって現在の市域が確立する経過を追ってみましょう。

まず、幕末の状況をおさらいしましょう。

孝明天皇は慶応2年(1866)12月25日に35歳で崩御されました。

明治天皇は翌年の慶応3年1月9日に15歳で即位されました。

江戸幕府の15代将軍徳川慶喜は同年10月14日に大政奉還をして政治の実権を朝廷に返還しました。

同年12月9日にいわゆる「王政復古の大号令」が発せられ、若き明治天皇のもとに公家・雄藩大名などからなる新政府が発足し、260年余り続いた江戸幕府は滅亡しました。新政府はその夜の会議で慶喜を新政府に加えないことと、内大臣の官職と領地の返上を命じることを決めました。しかし、旧幕府側はこの措置に不満を抱きました。

慶応4年1月3日、薩摩藩と長州藩を中心とする新政府軍と旧幕臣や会津藩や桑名藩を中心とする旧幕府軍との間に、京都で武力衝突が起きました。有名な

鳥羽・伏見の戦いです。これが戊辰戦争の始まりです。慶応4年(明治元年、1868)の干支の戊辰に由来する呼称です。同4月11日新政府軍を代表する西郷隆盛と旧幕府側を代表する勝海舟との交渉によって江戸は戦火を交えることなく新政府の治めるところとなりました。しかし、一部の旧幕臣や会津藩はなおも抵抗を続け、その戦火は広がりつつありました。東北諸藩も奥羽越列藩同盟を結成して会津藩を助けましたが、次々と敗れ、9月22日に激しい戦闘の末、ついに会津藩も降伏しました。一連の戦いはまだ続きます。翌年5月18日、旧幕臣・榎本武揚らが函館の五稜郭の戦いに敗れて、ここに戊辰戦争と呼ばれる1年5ヵ月に渡る一連の激しい戦いは終わり、国内は新政府のもとに統一されることになりました。

県内の様子はどうだったのでしょうか。慶応4年5月下旬に小田原藩が新政府軍に反旗を翻した箱根戦争は、戦闘自体は小規模でしたが、県内一円の人々に動揺を与えました。相模川を挟んで両軍が衝突するとの流言に、川沿いの柳島・中島・平太夫新田・今宿などの村々は大混乱に落ち入りました。その様子は、柳島の名主・藤間柳庵が記した「太平年表録」の中に記されています。「太平年表録」は市史編さん担当で『史料集』として発行していますのでご参照ください。

一方、新政府は慶応4年3月14日に五箇条の誓文を定めるなどして、その基礎を作りつつありました。7月17日には江戸を東京と改めました。

慶応4年9月8日の天皇の即位を節目に、年号を明治と改め、明治元年9月8日となりました。こうした動きの中で新政府は、東国鎮撫の切り札として天皇の東京行幸を布告しました。天皇一行は9月20日に京都を出発して、10月10日馬入川に仮設された船橋を渡って茅ヶ崎に入りました。南湖の本陣松屋、佐藤清左右衛門宅で小休、小和田で再び小休して、宿泊のために藤沢の遊行寺に入りました。

このようにはじめられた新政府の政治的・社会的変革は、近代日本の出発点となりました。これら諸々の変革は、今日、明治維新と呼ばれています。

そんな時代の中で、茅ヶ崎の村々も大きな変革を迎えました。

現在の市域は、江戸時代の23の村々で構成されて

います。幕府領、旗本領、大名領（西大平藩、藩主は大岡氏）、寺社領に分かれていましたが、殆どが旗本領で、しかも1ヵ村に複数の領主を持つ相給村が多く、幕末の時点で23ヵ村に延べ40名の領主がいました。

新政府の最大の課題は、江戸時代の支配構造を解体し、中央集権的な支配体制を作り上げることでした。そのために、慶応4年（1868）8月に旗本領収公、翌明治2年（1869）の版籍奉還、同4年7月の廃藩置県などの改革を推進しました。

慶応4年8月の旗本領収公によって、香川・堤・室田村を除いて、伊豆の江川太郎左衛門の統括する韭山県に属しました。その後、9月・10月にかけて神奈川県に移されました。香川と堤村は寒川の下大曲村と共に、大岡越前守の領する三河（愛知県）の西大平藩の管轄になりました。室田村に関しては、明治4年以前の所属は分かりません。

西大平藩の廃止によって香川・堤・下大曲村の3ヵ村は神奈川県に移管されました。

明治4年（1871）4月政府は戸籍編成に着手します。その調査のために数ヵ村を組み合わせる新しい区画を設置しました。この戸籍区を基本として、明治5年～7年にかけて大区小区制が整備されてきました。県下の武蔵国と相模国の7郡を20の大区に分け、その下に石高約2000石を目安に数ヵ村を組み合わせました。茅ヶ崎は第18大区に、そして、3、4、5、9の小区に属しました。大区の区務所は小和田の広徳寺に置かれました。

明治11年（1876）7月、郡区町村編成法、府県会規則、地方税規則を施行して大区小区に代わる新しい地方制度を定めました。三新法体制と称されています。この体制は地域的まとまりが重視され、従来の村が基本体制として復活しました。

小和田・菱沼で2ヵ村組合、室田・高田・赤羽根・甘沼で4ヵ村組合、矢畑・西久保・円蔵・浜之郷で4ヵ村組合、今宿・松尾・柳島・下町屋で4ヵ村組合、行谷・下寺尾で2ヵ村組合とそれぞれ組合をつくっています。組合は旧小区より小さく、地域ごとのまとまりを、言い換えますと江戸時代の村々を重視していることがわかります。平成の現在でも大字として、学校の学区でも、防災の拠点単位でも機能している単位と

いえます。

明治17年（1884）に三新法の一部が改正されました。行政単位が拡大され連合戸長役場が設置されました。これは行政能力の向上を目的としたもので、行政区画を拡大して一定水準以上の財政力を持った行政単位をつくるとともに、有能な行政吏員を登用することを狙ったものでした。

明治10年代～20年代初頭にかけて、帝国議会の開設を控えた明治政府は、近代国家の確立を急いでいました。地方制度も三新法体制に代わる永続的な制度の確立が求められていたのです。市制町村制は明治21年（1888）4月に公布され、翌年4月に施行されました。これは村を単なる行政区画ではなく、自治体として確立することを目的としたものでした。

市域では連合戸長役場がほぼそのまま、茅ヶ崎、松林、鶴嶺、小出の新しい4ヵ村に再編成されました。

その後、明治41年（1908）10月に、茅ヶ崎、松林、鶴嶺の3ヵ村が合併して町制を施行して茅ヶ崎町に、昭和22年（1947）10月1日には戦前からの念願の市制を施行して茅ヶ崎市となりました。その日、茅ヶ崎小学校の講堂で開催された祝賀の会は盛大だったと伝わっています。「昭和の大合併」といわれる政策の中で、昭和30年（1955）4月5日の小出村の分村合併を経て今日の市域が確定しました。遠藤地区は藤沢市に合併されました。

今回は大雑把に町村の変遷を振り返ってみました。村の成立、町の成立、市の成立に関しては、詳しくお話したいこともありますが、次の機会に譲りたいと思います。

これで終わりにしましょう。聞きなれない資料の名前がたくさん出てきて、混乱した人もいたと思いますが、茅萱を見たり、地図を開いたり楽しい時間を過ごすことができました。今日のお話は最初に紹介した『茅ヶ崎市史』や「地図」「かるた」などから分かります。疑問があればそれらを公民館や図書館で読んでいただければと思います。

今日のお話が少しでも歴史に興味を持つきっかけになれば幸いです。

ご静聴ありがとうございました。（少々の拍手）

追って

「市民学び講座」を再現してみました。話し言葉を書き言葉にする難しさを感じました。

思わぬ質問も飛び出し、楽しい生涯学習の企画に関与できた喜びを感じています。

香川公民館における丸ごと博物館の子供部会の企画に参加する機会をいただきました社会教育課の関本ゆかりさん・高橋知さん・加藤大二郎さん、茅ヶ崎郷土会の尾坂郭子さん・前田照勝さん、茅ヶ崎民話の会の高橋裕子さんはじめ会員の皆さんに心より感謝いたします。

また、執筆に対してご配慮をいただいた市文化資料館の学芸員の須藤格さん、何度も市民学び講座に同行していただいた文化生涯学習課市史編さん担当の井上香乃さん、日頃アドバイスをいただく市史編さん担当主査の和田順一さん、写真をご提供いただきました前田照勝さん・加藤大二郎さんのご協力に感謝いたします。

今回も日頃の勉強不足を痛感しました。『茅ヶ崎市史』『写真集』をあらためて繙いて市民の皆様のご質問にいつでも対応できますように研鑽に励みたいと思います。

校正中に、『鶴嶺郷土誌』（昭和3年1月完成）の「郷土の植物、チガヤ」の項に茅ヶ崎の地名の由来に関する記述のご指摘を、公園みどり課の岸一弘さんからいただきました。ご協力に感謝いたします。

なお、この拙文を、2年間活動をともにして、この春、新たなる飛躍を決意された「井上香乃さん」へのはなむけといたします。

ご希望が叶えられますことを、心よりお祈りいたします。

いつまでも、夢を忘れず、お元気で、ご活躍を！

（平成26年3月19日、送別の宴にて）

*1 茅ヶ崎市文化生涯学習課市史編さん担当

平成 25 年 10 月 16・18 日、於；香川公民館

レジュメ 「香川」の歴史

① 「茅ヶ崎」の地名の由来は

茅：大むかし、茅萱（ちがや）が一面に生えていたのでしょうか。
崎：海や湖につき出た陸地のはしのことです。

文明 2 年（1470 年、543 年前の資料）の熊野那智大社（くまのなちたいしゃ）
に関する資料に記されています。

② 「香川」（「香河」）が初めて資料に出たのはいつ

大庭御厨（おおばのみくりや）、「みくりや」とは伊勢神宮の神領です（荘園の一種です）。茅ヶ崎から藤沢にかけての広大な地域を開墾して、鎌倉権五郎景正（かげまさ）が伊勢神宮に寄進しました。

天養 2 年（1145 年、868 年前の資料）の『天養記（てんようき）』という資料に事件の様子がみえます。

③ 香川小五郎・三郎らの活躍

承久 3 年（1221 年、792 年前の資料）6 月、『吾妻鏡』（あずまかがみ）という資料に記されています。「承久の変」の活躍が認められて安芸の国（あきのくに、現在の広島県）に移転しました。

その後、香川氏の一族が正平 17 年（1362）頃に讃岐の国（さぬきのくに、現在の香川県）に移転しました。

④ お伊勢参りと香川の人々

文政 8 年（1825 年、188 年前の資料）1 月 9 日～2 月 12 日の 35 日間、11 人の香川村の人々がお伊勢参りに行きました。『伊勢道中覚』（三橋家文書）に記されています。

⑤ 村・町・市の誕生

- ・神奈川県高座郡松林村香川の誕生（明治 22 年 1889、124 年前、4 月 1 日）
- ・神奈川県高座郡茅ヶ崎町香川の誕生（同 41 年 1908、105 年前、10 月 1 日）
- ・神奈川県茅ヶ崎市香川の誕生（昭和 22 年 1947、66 年前 10 月 1 日）

図 1 レジュメ 1

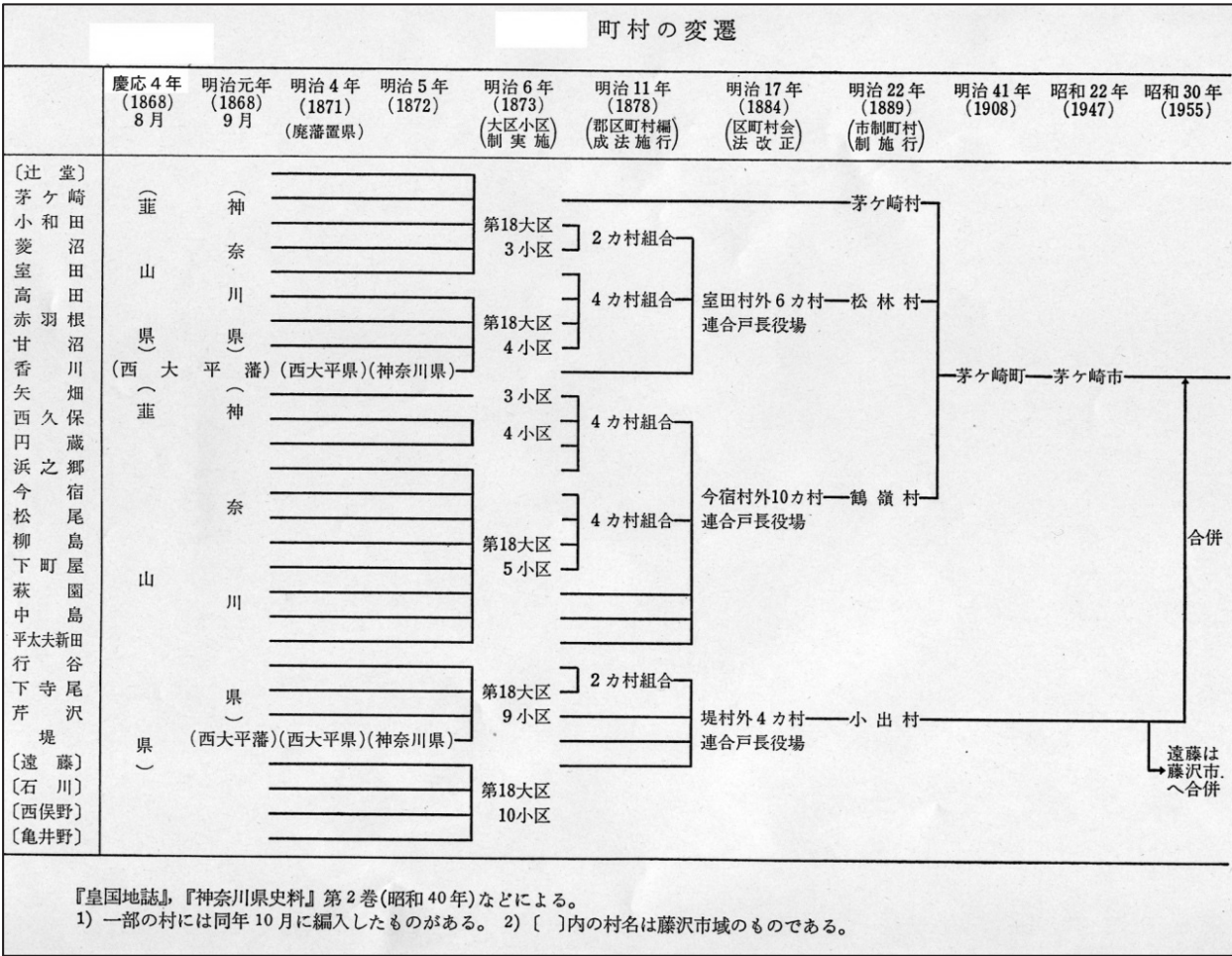


図 2 レジュメ 2